

3) 慢性硬膜下血腫の検討

—高年者と若年者との比較及び MRI
の有用性について—

井淵 安雄・佐藤 進
関口賢太郎・井上 明 (山形県立中央病院)
加藤 俊一 (脳神経外科)

高年者の慢性硬膜下血腫の特徴を知るべく若年者と比較し検討した。対象は、昭和55年から平成5年まで当科に入院、加療した慢性硬膜下血腫169例(男135例、女34例)で年齢は0才～88才、平均63.3才である。方法は高年者(70才以上)と若年者(69才以下)に分けて side、頭部外傷の既往の有無、外傷の原因、症状出現までの期間、症状、CT像、手術時測定した血腫量、予後について比較検討した。結果：頭部外傷の既往の有無、症状出現までの期間、血腫量については両者に差は認められなかった。70才以上の高年者は69才以下の若年者に比較して、血腫は両側に存在するのが多く、症状は頭痛が少なく focal sign や痴呆で発症する症例が多く認められた。CT 所見では、血腫が一樣に高吸収域を呈す症例は少なく、モザイク状や多房性の mixed density を呈す症例が高年者に多いように思われた。予後については再発例は高年者に多い傾向があった。これらの相違が何故出るかについては不明である。

次に MRI が慢性硬膜下血腫の、特に両側性のものや、円蓋部に存在する血腫の診断や手術適応を決定する際に大変有用であった例を、44才男性の症例について報告した。

4) 脳主幹動脈閉塞性病変に対する MRA の有用性

西巻 啓一・福田 光典 (立川総合病院)
西野 和彦・亀田 宏 (脳神経外科)

5) モヤモヤ病出血例に対する血行再建術の有効性

竹内 茂和・小池 哲雄
佐々木 修・皆河 崇志
相場 豊隆・阿部 博史
小澤 常德・反町 隆俊
中里 真二・玉谷 真一 (新潟大学脳研究所)
田中 隆一 (脳神経外科)

【目的】モヤモヤ病出血例に対する治療方針には未だ議論が多い。我々は側副血行路としてのモヤモヤ血管を減らすことが出血予防となり得ると考え、積極的に血行再建術を行ってきた。今回、その有効性と問題点について

検討した。【対象】当科及び関連施設において、CT 導入以後に初回出血を認めた35例(小児5例：出血時5～15；平均10歳、成人30例：22～63；平均44歳)で、死亡例を含めた追跡期間は66ヶ月。血行再建術は小児4例8側、成人23例40側に行われた。【結果】初回出血様式は、大脳基底核14例(小児2例)、視床4例、皮質下7例、出血点不明の脳室内6例(1)、脳室壁2例(2)、脳幹1例、出血点不明のくも膜下出血1例であった。術後2日目に血管吻合側皮質下に出血した1例を含め、再出血は14例20回(32歳の1例を除き、全例41歳以上)に認め、初回と同一部位の出血は4例5回であった。死亡は9例で8例の死因が再出血であった。成人10例(7例が再出血)に高血圧を認め、13例で虚血発作(12例は出血以前で15歳以下の発作は6例)を認めた。再出血は、成人術後の23例40側中9例12回(初回と同一部位は4例4回)、成人非手術例の13例20側中6例8回(1例1回)に認めた。成人例で術後脳血管撮影施行した19例36側では、手術による側副血行形成良好18側(モヤモヤ血管減少16側)、中等度～不良18側(減少2側)で、再出血を各々4例4回、4例5回に認めた。成人例を40歳以下10例(手術は9例17側)と41歳以上20例(14例23側)に分けると、側副血行形成良好は各々13/17側(モヤモヤ血管減少11側)、5/23側(5側)で、再出血を1/17側、11/23側に認めた。小児例で術後血管写を行った7側では良好～中等度の側副血行形成とモヤモヤ血管の減少を認め、再出血を認めていない。【結論】小児例や40歳以下成人では血行再建術による出血予防効果が期待できると考えられたが、これを結論付けるためにはより多数例での長期追跡が必要と思われた。

6) IDC を用いた脳動脈瘤の治療

小池 哲雄・反町 隆俊
小澤 常德・中里 真二 (新潟大学脳研究所)
竹内 茂和・田中 隆一 (脳神経外科)

7) A-A dislocation に対する後方固定術

佐々木 修・中川 忠 (桑名病院)
藤井 幸彦・玉谷 真一 (脳神経外科)

A-A dislocation に one piece cervical device (OPCD) を用いて、後方固定を行った。症例は外傷性1例、特発性1例である。体位は prone で、neck は neutral、術中頭蓋を 5 kg で traction した。正中切開で C1～3